

事業概要書

事業名	福島県南相馬の子どもたちと高齢者の心のよりどころ「La MaMa ODAKA」 活用事業				
開始日	2022/11/1	終了日	2023/10/31	日数	365 日
団体名	一般社団法人 OSPA				
(カウンターパート)	(任意団体) 青春五月党				
担当者名	柳 丈陽	スタッフ人数	4 人		

事業費総額 (税込)	5,000,000 円
CF 事業枠	5,000,000 円
その他資金	

事業目的	ブックカフェ「フルハウス」と、隣接する劇場「La MaMa ODAKA」を活用し、福島県浜通り地域の高齢者と子どもたちをはじめする地域住民が、演劇に触れ、舞台上で感情を表出させる役者から自分の悲しみを表に出すことを学ぶ機会を持続的に提供する。演劇を通じて被災した地域の住民の悲しみを癒すことで、「心の復興」を後押しする。
事業全体の概要	<p>●一般社団法人 OSPA について</p> <p>一般社団法人 OSPA は、Civic Force パートナー事業の第 1 期事業で設立された一般社団法人であり、その事業は大きく 3 つに分かれている。</p> <p>① ブックカフェ「フルハウス」(下記記載)</p> <p>② 「La MaMa ODAKA」(下記記載)</p> <p>③ 演劇公演・文化芸術イベント等企画制作事業</p> <p>団体設立後には公演や朗読会、イベントを計画していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により人を集めて催し物を行うことが難しかった。しかし、2020 年 3 月 20 日にはコロナ禍でイベントの開催も難しい中、「フルハウス」の事業の一貫として、La MaMa ODAKA に作曲家の大友良英さんと劇作家の鮎屋法水さんをゲストに招き、イベントを開催。地元住民はもちろん、地域外からも多数の観客が来場した。また、2022 年 4 月には、「柳美里のふたりとひとり」と題し、歌手でクープハイプの尾崎世界観さんをゲストに、Youtube ライブを実施したほか、ゲストに劇作家の谷賢一さんを招き Twitter スペースによるオンラインイベントも開催した。</p> <p>●フルハウスとは</p> <p>オーナーである作家 柳美里は、福島第一原発から半径 20 キロ圏内は警戒区域と指定され、立ち入りが制限されることが発表された 4 月 21 日に、立ち入りが制限される前に自分の目で見ておかなければとの思いから南相馬の地を訪れた。立ち入り制限が開始される前日のことである。これを機に福島県南相馬市へと何度も足を運び、そのことを知った臨時災害放送局・南相馬ひばり FM からオ</p>

ファーを受け、2012年2月から「柳美里のふたりとひとり」という番組がスタートした。柳美里が南相馬市に深く関わるきっかけとなった出来事である。

当初は当時住んでいた鎌倉から南相馬まで毎週のように通っていたが、安全な場所から通いながら住民たちの話を聞くことに違和感を感じ、南相馬への移住を決意。2015年4月に南相馬に転居し、南相馬ひばりFMが2018年3月に閉局するまで、約600人の住人たちとの対話を続けてきた。

南相馬市は福島第一原子力発電所から半径20キロ圏内の場所にあり、旧警戒区域にあたる。2016年7月には、一部の帰還困難区域を除いて避難指示が解除された。しかし、未だ帰還者は以前の30%程度に過ぎない状態となっている。住民たちは原発事故によって働く場所を失い、学ぶ場所を失い、地域のコミュニティーまでも奪われた。ラジオ番組を通じて住民たちと対話しながら、原発事故が奪ったものの大きさ、そしてふるさとを奪われた人々の悲しみや苦しみを知った柳は、人々が集まって語り合える場所を作りたいとの思いから南相馬市小高区の小高駅のそばに住居を構え、老若男女問わずに集える場所として、2018年4月、本屋「フルハウス」をオープンさせた。

フルハウスを訪れる人の中には、多くの高校生たちもいる。近くにある小高産業技術高校の生徒達である。生徒の多くは小高区外に住んでいるため、常磐線で電車通学をしている。しかし電車は1時間から2時間に1本しかない。駅の近くには休憩できる場所もなく、生徒の大半が空調設備のない駅舎で電車を待つしかない環境であった。駅の周辺は閑散としており店もまばら、日が落ちるのが早い冬などは明かりも少なく薄暗い。そのような環境の中で高校生たちが安心して電車を待つことができる空間、そして、高校生だけではなく誰でもが気軽に入ることができる地域の集いの場としての役割を担う場所、それが「フルハウス」である。

■「フルハウス」第1期事業での成果

第1期事業では、地元住民と地域の子どもたちのためのブックカフェ「フルハウス」をオープンすることができた。オープンしたブックカフェでは、主に地元の食材を使った4種類のフードメニューと多数のデザート、ドリンクを季節ごとに替えて提供しており、2022年3月で23年目となるが、毎日多くの地域住民や地元の高中生たち、そして県外からの顧客で賑わっている。雇用面では、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって帰還困難区域に指定された双葉郡大熊町と富岡町の住民を従業員として雇用している。

また、「ブックカフェフルハウスオープニングイベント」を2020年3月に開催し、「あまちゃん」や「いだてん」の作曲で知られる大友良英さんと、劇作家・演出家の飴屋法水さんにご出演いただき、俳優を交えたリーディングと音楽の融合による新しい演劇を上演することができた。

さらに、小説家などの作者による朗読も実施したが、その後は新型コロナウイルスの感染拡大によって中止を余儀なくされた。

●La MaMa ODAKA とは

ブックカフェ「フルハウス」に併設する形で造られた劇場で、2017年3月に行った「cascade」がこけら落とし公演である。それ以降、2018年9月に福島県双葉郡の子どもたちが通う福島県立ふたば未来学園高校と連携して制作・上演した、青春五月党「静物画」公演や、地域住民の高齢者の皆さんと共に創った「町の形見」など、地域密着型の、東日本大震災で被災した方々に明るくなっ

ていただけるような作品や、悲しみや苦しみなどの感情をある意味で「代弁」し、観客と演者が一体となって共感しあえるような内容の演劇公演を行ってきた。

また、2019年には五反田団の前田司郎を演出家として迎え、青春五月党「ある晴れた日に」公演を行うなど、地域における芸術の発信拠点になっている。

●取り組むべき課題

もともと過疎の傾向にあった南相馬市は原発事故以降人口減少が加速し、街の衰退が著しく進んでいる。小高駅は500名以上の生徒が利用する駅であるにもかかわらず、駅前には建物も少なく閑散としているような現状。特に冬などは薄暗く、生徒たちにとって安全な環境とは言えない状況が続いていた。このような状況も常磐線の全線復旧によって少しは改善されるかと思われたが、小高駅は完全な無人駅となることが決まってしまう、生徒たちの通学環境のさらなる悪化が懸念されるような状態である。

それに加え、南相馬市は除染作業のために多くの作業員が入っているため男性の人口比率が全国で二番目に高い地域となっており、特に女性や生徒たちが無人駅で電車を待つ事に対し、保護者等から不安の声が上がっている。地域にある復興拠点施設で過ごすことも可能だが、スペースがそれほど広くなく、生徒たちの中には思春期ならではの人間関係の問題でそこを利用しない・できない生徒たちもいる。そういった生徒たちが安全で快適に電車を待つことができる空間が必要である。フルハウスは地域の既存の施設だけでは満たすことのできないニーズを充足するための場所として、浸透してきた。様々な世代の人が集う場所となったことで情報の発信力・拡散力も大きくなっている。従って、団体内で「フルハウス」事業と「La MaMa ODAKA」事業との連携を強化することは非常に重要である。

当劇場では、2018年に地域の高校生と上演した「静物画」と、地域の70歳以上の高齢者の皆さんと上演した「町の形見」があるが、いずれの作品でも東日本大震災や第二次世界大戦、そして自らの人生の変わり目となった病気や青年時代の「記憶」を語るというものである。この2作品に出演したり、観劇頂いた方の中には、「震災の記憶を初めて他の人に語った」や、「自分のことと重ね合わせて共感することで、自分の重荷が軽くなった」などの声が寄せられた。このように、自分の記憶をアウトプットする機会というのは非常に重要であるにも関わらず、その機会は老若を問わずあまりない。このような記憶の他者との共有や、東日本大震災や第二次世界大戦の記憶の伝承こそが地域の課題の一つである。

また、家族や友達には話せないような悩みや自分の将来についての相談ができる場所、舞台芸術の道に進みたい若者、作家を目指す若者たちが、直接“作家、劇作家・柳美里”と対話し触れ合える場所は彼らの『心の拠り所』となり、俳優や演劇スタッフなどのプロフェッショナルを目指す若者の夢の後押しをすることにもつながる。

これらの活動を実現するためには、劇場がフル活用できる環境でなければならないが、現状ではそのような環境に整備するに至っていない。そのため、「La MaMa ODAKA」が興行場法ならびに消防法に適合した「劇場」の要件を満たすことが優先課題である。

興行場法（福島県興行場施行規則 ※1）（ならびに消防法では、興行場の許可を受けるために必要な換気や構造に関する要件が定められており、改修前の設備ではこれを満たしていないため、昭

和二五年五月八日付けの厚生省公衆衛生局長・建築省住宅局長・文部省社会教育局長通達「集会場及び各種会館その他の施設を興行場として使用する場合の法の運用について」（衛発第二九号）（・集会場及び各種会館その他の施設を興行場として使用する場合の法の運用について（◆昭和 25 年 05 月 08 日衛発第 29 号）（mh1w. go. jp））によって認められている「月四日までの興行」という条件を守る形で上演、開催してきた。

しかし、この条件を守る形での事業では、「居場所の創出」や、子どもたちやお年寄りを始めとする地域住民にとっては、日数が少ないことで親しみにくい場所になってしまうし、本事業の目的である「心の復興」を目的とした演劇公演には著しく不十分である。南相馬市には、2 箇所の生涯学習センターと 1 箇所のホール施設があるが、これら施設は音楽公演などに向けて作られた施設であり、残響特性や舞台の構造（プロセニウム形式）などが舞台演劇には向かないつくりとなっている。本事業にて実施する演劇公演はマイクを使用しないため、残響がありすぎる既存の施設では公演が難しい。この点、La MaMa ODAKA は残響時間が短く、音響的観点でマイクを使わない小劇場的公演に適している。さらに、La MaMa ODAKA は舞台観客との距離の近さ、目線の高さが低いというところで、既存のホール等と大きく異なる。このような特性を持つ劇場だからこそ、地域が抱える課題をより効果的に実施することができる。

La MaMa ODAKA が興行場法に適合した劇場としてオープンすれば、日数制限なく公演を実施することができ、さらに多くの地域住民に演劇公演を届けることができるだけでなく、子どもたちが集い、さまざまなイベントに参加できる機会を提供することが可能となる。「フルハウス」とも連携し、柳美里の人脈を生かした小説などの作者とのイベントを定期的に開催するなど、我々だからこそ出来る地域貢献が可能となるのである。

本劇場の整備が完了しリニューアルオープンした後は、「生徒達の居場所」「地域の人々が集う場所」としての役割のほか、劇場で働きたいという若者を雇用したり、役者や作家を志す若者を支え、後押しする場所としての役割も担うことになる。それらの役割を十分に果たすための持続可能な運営体制の整備なども行っていく計画である。

※1…福島県興行場施行規則 <https://onl.tw/BkH9f5r>

●パートナー協働プログラム対象事業

震災から 10 年以上が経過してもなお、町に賑わいは戻らず、度重なる災害や目まぐるしく変わっていく世界情勢に関心を奪われ、東日本大震災の風化、原発事故の風化が進んでいる。ハード面の復興は進んだものの、住民の心に空いた穴は未だ修復されておらず、「世の中から取り残されてしまった、忘れ去られてしまった」という寂しさや悲しさが住民の心を苦しめている。その悲しみや苦しみを癒すという意味でも、「La MaMa ODAKA」で本物の演劇に触れ、舞台上で感情を表出させる役者から自分の悲しみを表に出すことを学ぶのは、住民にとっては大きな意味を持つことになる。自分たちの思いを演劇などの形でアウトプットする機会を提供することで、「心の復興」へとつなげる。また、舞台の仕事に興味関心のある若者たちに仕事を知り、経験する機会を提供したり、劇作家 柳美里との触れ合いを通じ、若者の夢を応援していく。

以上を踏まえ、以下の事業を実施する。

○コンポーネント①

子どもたちや地域の高齢者が集う機会を提供するために演劇公演・イベント等を年間で 10 回開催するほか、ブックカフェフルハウスと連携した朗読会等のイベントを行うことで、劇場での本事業の目指す「心の復興」をさらに高い水準で実現する。

年に 1 回は地域住民向けの無料招待イベントを実施するほか、有料公演に関しても地域住民は一般向けチケットよりも廉価な設定とし、足を運びやすくする。その他、演劇ワークショップについては地域住民は無料で参加可能とし、より多くの住民が参加する機会を提供する。

○コンポーネント②

コンポーネント①をより効果的・効率的に実施するために、劇場の環境整備が必要である。興行場法に適合するための改修工事（避難誘導等の設備の整備、耐震性の確保、冷暖房・照明等設備の整備）は別の事業にて着手している。この他に、「椅子が地面に固定されていなければならない」が、現状固定されていないため、本事業においては新たに固定可能な椅子を購入・設置し、興行場法に適合した劇場となるよう整備を行う。

●期待される効果

・フルハウスは地域の住民、小高駅を利用する生徒たちの他、地域の高齢者など幅広い世代の住民が気軽に立ち寄れる場所である。そこで、フルハウスと連携してイベントの告知等を行うことで、地域住民への情報の拡散が可能となる。また、思春期の生徒たちの中には家族や友達には相談しにくい悩みを抱える生徒も多い。そのような生徒たちにとって、柳美里は「人生の先輩」であり、良き助言者となり得る。生徒たちの駆込み寺のような場所があることで、不登校や引きこもり等を防ぐ効果も期待できる。

・演劇公演や、地域参加型の演劇を上演することにより、優れた文化的価値を提供できるだけでなく、東日本大震災や新型コロナウイルスの感染拡大によって、傷付いた地域住民や子どもたちが自由な表現を通じて「悲しみの水路」をつくるための場を提供することは、地域住民の交流推進や居場所作りに繋がる。

・作家・劇作家である柳美里のもとで働きたい、自分の夢のために働く場所が欲しい、という若者たちと直接交流を持ち、彼らの夢を応援しながら、南相馬を「芸術の発信地」として盛り上げる第一歩とする。

■事業終了後の運営

既に La MaMa ODAKA での公演を希望する劇団等からの問い合わせが多数寄せられていることから、本事業終了後は、柳美里が主宰する劇団「青春五月党」の公演や、他劇団からも既に多数の上演希望のご連絡を頂いていることから、利用希望があった劇団のうち、地域住民や子どもたちに届けるという目的に合致した作品・団体を選出して上演の機会を提供するなど持続的に貸館を行い、観客収入に頼らず、施設利用料・付帯施設利用料などを生かした運営を行っていく。また、文化庁・

<p>内閣府や福島県との協働事業も実施予定であり、観客収入に頼らない、安定した運営が行える見込みである。</p> <p>■運営体制について</p> <p>本事業は、OSPA スタッフの他に「青年団」(http://www.seinendan.org/)と「Theater Project Tokyo」(http://www.tpt.co.jp/aboutus/index.html)の協力を受けて運営を行う。</p> <p>事業終了後は平田オリザさんの「アゴラ劇場グループ」に加盟する内諾を得ており、青年団の制作部と会計業務等の連携を進めて運営する計画である。また、来年度から内閣府の「浜通り映画演劇構想」も計画が進んでおり、OSPA が中核団体となる「浜通り演劇祭実行委員会」に内閣府・経済産業省・福島県からの出向職員が加わる方向で調整をしている。</p>	
事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)
<p>① 文化芸術関係のイベントの実施 (年 10 回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2022 年度：11 月 青春五月党公演 (4 回) 対象：地域+広域 ・ 2022 年度：12 月 谷賢一×青春五月党「福島滞在制作第一弾」(6 回) 対象：地域+広域 	<p>イベント参加者 1800 人 双葉郡、南相馬市周辺住民約 8 万人</p>
<p>② 地域の高齢者や子どもたちが演劇に触れる機会を造り、心の復興の後押しをするために、優れた演劇・映画作品を鑑賞できる場所として「La MaMa ODAKA」を整備する。</p>	<p>劇場来場者 5600 人 双葉郡、南相馬市周辺住民約 8 万人</p>